

フィリピン国立公共政策大学院とのシンポジウムで講演しました（2018/11/15）

テーマ：リスク管理におけるシミュレーション活用
会場：東北大学災害科学国際研究所（仙台, 日本）

2018年11月15日（木）に IRIDeS を訪問されたフィリピン国立公共政策大学院とのシンポジウムにおいて災害医学研究部門の江川新一教授と地域・都市再生部門の泉貴子准教授が講演しました。フィリピン国立公共政策大学院は、フィリピン政府の危機管理、公共政策、保健医療の関係者など幅広い実務経験者が所属しており、被災地の訪問や、国内の他大学、東北大学との連携、学術交流を目的として来訪されたものです。

江川新一教授は、リスク管理におけるシミュレーション活用についてシステムダイナミクス型シミュレーション、エージェント型シミュレーションについて、東日本大震災における保健医療ニーズの推移、西アフリカで発生したエボラウイルス感染症のアウトブレイクについて講演しました。また、泉貴子准教授は、国際的な防災への取り組みおよび地方自治体や地域に根付いた防災活動、仙台防災枠組におけるリスク管理の考え方、アカデミア、実務者の役割について講演しました。

行政・気象・医療などのさまざまな専門家からなる訪問団は、災害後に起きうる医療ニーズについても、それぞれの観点からさまざまな疑問を持ちます。2013年の台風ハイエン災害で IRIDeS が災害の現地調査を行ったことで、フィリピンの災害医療体制や、当時の医療ニーズに対する理解があったことも議論を加速しました。人々の健康を守ることは、保健医療のクラスターだけの仕事ではなく、すべてのクラスターが協力すること、ひとつの考え方ですべてが解決できるわけではなく、しなやかな強さ（レジリエンス）を身につけるにはどうしたらよいかということが話されました。

また、エージェント型シミュレーションを用いたエボラウイルス感染症のモデルでは、人々の心や態度に影響を与える因子を組み込み、社会の記憶力（忘れやすさ）によりどのように被害が拡大あるいは縮小するかを再現できることは大きな興味を持っていただくことができました。災害の記憶は忘れられていきますが、記憶や教訓を知識に変えて繰り返し学習することで、被害を少なくするための知識に持続性を持たせることがシミュレーション上で再現することができます。感染症をモデルにしていますが、さまざまなリスク管理や政策形成に役立つアイディアになれば幸いです。

仙台防災枠組はリスクを科学的に理解すること、リスクを管理すること、効果的な対応のために備え、Build Back Better（よりよい復興）をすることが骨子です。7つの具体的なグローバルターゲットの中には、2030年までに社会の重要なインフラとして病院や学校の災害による被害を大幅に減少させることがあげられています。世界的な枠組を理解しながら、地域の特性にもとづいた政策提言をすることの重要性が共有されました。フィリピン国立公共政策大学院からは、今後も当研究所との連携を維持・強化しつつ、こうした共同セミナーや連携協定締結などを協議したいとの申し出がありました。



講演する江川新一教授



講演する泉貴子准教授



フィリピン国立公共政策大学院の学生・OBO
Gを含む聴講者



災害研前での集合写真

文責：江川新一（災害医学研究部門）、泉貴子（地域・都市再生研究部門）